

[原 著]

発達障害児を育てる父親の生活体験 — 3人の父親と息子達の歩み —

今西 良輔

札幌市児童福祉総合センター

要 旨

本研究は、発達障害児を家庭の中で育児する父親が、子どもに向き合う中でどのような経験を積み上げているのかを明らかにすることを目的とした。研究結果より『子どもへ関わりたいが上手くいかない良くわからない』『育児は母親頼りから、父親なりに協力していく』『障害はよくわからないが、ありのまま受ける』『仕事重視の生活に葛藤し、調整を図る』『父親自身の模索と変化』『仲間や信頼できる人との出会い』『子どもを社会に出したい』『子どもの将来が不安になる』の8つの体験が導かれた。父親は、育児姿勢の変化だけでなく、父親自身を柔軟的に変化させ成長していた。父親は、自ら子どもに関わろうと努力もしているが上手くいかない。家庭に関わる時間が乏しいため子どもに違和感を感じたとしても具体的かつ深刻な状態を直接目にするのが難しい。父親自身が発達障害について理解しやすい体験やきっかけを求めているのではないかと考えられた。

キーワード

発達障害児 父親 子育て 生活体験

I. はじめに

従来から父親は、家計の支え手として期待されており、いわゆる経済的支柱が役割とされてきた。親の子育てを考えるにあたりその役割と認識というものには、父親と母親という歴史的・社会的役割、男性と女性という性差による位置付けがあるため、子育てを通して様々な差異が生まれている。国民生活白書(2007)によると、子育てに参加することも父親へ求められるようになってきていると示されているが、やはり父親は家事・育児分担から免除される暗黙の合意が形成されている。育児に関しては、主に母親が中心となっている傾向が個人的にも家族的にも社会的にも求められているのが実情である(北川ら1995; 及川ら1995)。筆者は、障害のある子ども(以下、障害児と記述)を養育する中で、父親の役割はどのように位置づけられているのかに関心と興味を抱いた。これまで、養育する過程において、実は親もまた成長する、という見解があるが、その多くは母親の研究から導き出されている。父親もまたこうした過程の中で、多くのことを経験し、感じ、その上で親としての変化が生

じているはずである。それを明らかにすることができないだろうかと思っている。

母親は、育児ストレスの程度に関わらず「夫」「実母」からの心理的・手段的サポートを受けており、今後も受けることを望んでいる(荒木, 2001)という報告があり、福丸(2003)も、父親が母親の育児の悩み相談を聞き子育ての大変さを理解するという精神的サポートをすることで育児不安を軽減させるということを指摘している。伝統的な性別役割分業という理解のもと、見ないようにしてきた育児の大変さは、生み育てる方向からの撤退(少子化)か、家族総出の子育てを構築するのか、という境界線上にあると言えよう。例えば、虐待において、母親の育児不安やストレスがその要因の一つに挙げられる一方で、父親の育児不参加、家庭を顧みないことへの指摘も大きい。これらから、母親の子育ての裏面で父親の育児参加の仕方が議論される。つまり、育児において、父親の役割や使命は、従来言われているほど、小さくはないと思われる。

健常児を育てるよりも家庭生活の中で、配慮をしたり、手をかけなければならぬ障害を抱えている子どもに対して、従来からすると母親がその負担を多く担っているのが現状であろう。父親の家庭参加を促進している現代では、父親が担い手となるようにするためには、これまで障害児の特性や特徴に合わせて日々生活を送ってきた父親の体験から検討することが必要である。支援の必要性や支援の検討をする上でどのよ

<連絡先>

今西 良輔

〒060-0007 札幌市中央区北7条西26丁目

札幌市児童福祉総合センター

TEL: 011-622-8630

E-mail: ryosuke.imanishi@fel.city.sapporo.jp

うに障害児と向き合い生活を歩んできたかを振り返りたい。

II. 問題の視点と研究目的

子育てによる父親と母親の変化や成長として、新たなストレスが生まれること、親としての自覚が芽生えること、人間として成熟する(新谷1993)といった影響を受けており、我が子を育てることで成長発達が見えてくる。また、人間として成長することは、障害による困難を通して、新しい価値観を再構築する心的作業であり、自分の考え以外への気づきや過去の価値観に執着・こだわることなく、それらを取り込み・共感し、納得する過程を踏むことである(目良1998)。親の研究については、これまで主に母親を中心としたものが多く見られていた。

父親研究に関しては、自身の意識の変化に関するもの(牧野1996;森下2006)や障害児の父親としての在り方を検討(田中2006)したもの、父親の役割について検討している研究(柏木1993;下川原2004;原井川2008)は散見されている。しかし、父親自身の語りにも焦点を当てた研究は見つけることができなかった。

健常児と障害児を持つ父母を比較すると、障害を持つ両親に「柔軟さ」「視野の広がり」の変化があることも明らかにされている研究がなされている(柏木ら1994)。さらに、障害児の父親は、健常児の父親に比べて子どもの世話や家事での雑事に対して協力的な傾向があると指摘されている(中塚1989)。

障害児の育児困難を経験しながらの生活を通して親が得られる成長感というものは、肯定的な育児へと結びつけ、子どもの発達に良い影響を及ぼしている(橋本ら2004)。

障害児の父親の育児体験について、田中(2007)は、重症心身障害児を持つ父親にインタビュー調査を実施し、共通した体験を「ショックと現状の克服」「命を守る」「妻の負担を軽減するために育児の役割や責任を調整する」「育児と仕事のバランスをとる」「父親としての自分を模索する」「家族と育児の喜びを共有する」といった6つに分類した。そこでは、父親自身なりの育児を見出すことで柔軟な育児姿勢に繋がっていることを指摘している。そして、父親は、母親とは違う視点で自分なりに育児の方策を見出したり、子どもの反応を捉えながら関わっており、父親の子どもの見方、気づきを支える支援が重要と提起している。

障害児の父親の大変さなどは指摘されおり、父親の役割意識に関する研究、育児に関する検討はなされてきている。しかし、どれもが、先天性による障害など出生してからすぐに障害があると告知されているものが多く見受けられている。現在の発達障害は、早期発見をされるようになってきたものの、すぐにわかる障害とは言い難く、年齢を重ねてからわかった人も多

い。障害を抱えていても、障害告知を受けていなくても社会適応して生活している人も存在しているが、育児の中で個々様々な特徴に親は関わってきている。

発達障害の子どもと母親については研究がなされてきているが、父親についての研究はごくわずかであった。実際に父親を中心としたおやじの会(町田おやじの会2004)が近年見られてきたように少しずつ家庭内の父親の存在に焦点が当てられてきたが、研究としては未だ乏しい状態である。

そのため、本研究では、障害児を養育することで、父親の生活環境や体験にどのような変化を与えてきたのかを、田中(2007)に倣い、体験や経験を中心に検討したいと思っている。発達障害児を家庭の中で育児する父親が、子どもが生まれて向き合っていく中でどのような経験を積み上げているのかを明らかにすることを目的としている。

III. 研究方法

1. 調査方法

調査協力者は、北海道の発達障害の親の会に所属している父親を対象とし、18歳から29歳の子どもをもつ父親3名である。調査方法は、インタビュー調査法を用いて半構造化面接を用いた。調査期間は、2010年8月から9月とし、数回に分けて面接を実施した。面接は、1人3時間程度で実施している。全員の承諾を得て、ICレコーダーに録音し逐語録を作成した。

面接内容は、子どもが生まれて、障害がわかり、そこから子どもの成長する過程とこれからの先の将来について父親として思っていたことを自由に語ってもらうこととした。

2. 分析方法

分析方法は、質的データの取扱い(L.リチャーズ2009)を参照しながら、定性的(質的)コーディングを用いている(佐藤2008)。父親が父親として育児や障害に気づき、感じていたことの語りを研究目的に照らし合わせながら質的に分析を行った。インタビューにより語られたデータに沿って、意味内容ごとにコード化を行う。さらにコードからカテゴリーへと一般化を行った。そして、各カテゴリーを照らし合わせながら、コアカテゴリーへと抽象度を上げていく作業を実施した。

3. 倫理的配慮

研究対象者となる父親に対して研究の趣旨を書面と口頭にて説明を実施し、データは目的以外に使用しないこと匿名と守秘の保障、参加を途中で拒否する権利の保障、研究参加を断った場合に個人に不利益が生じないことについて同意を得ている。本研究は、北海道大学倫理委員会の承認を得て実施した。

IV. 研究結果

調査協力者は、40歳代1名、50歳代2名の父親で、子どもは青年期に達している18歳～23歳までの3名の男性である。調査協力者である父親たちの語りを「」で引用し、コードを【】、カテゴリーを<>、コアカテゴリーを『』と示している。分類は表1を参照。

・A氏：aさん、母親、長女、次男の5人世帯である。aさんが20歳～21歳位と成人した後に発達障害の診断を母親より告知されている。aさんは、通常の小、中、高校卒業後、農業を行った後、現在就労支援施設を活用している。

・B氏：bさん、母親、長女、母方祖父の5人世帯である。bさんが8～9歳の頃に発達障害と診断を受けている。通常の小、中、高校卒業後、就労の準備期間4～5年過ごし、現在清掃業務を行っている。

・C氏：cさん、母親、長女、次男の5人世帯である。cさんのため転勤を希望しないことを職場に伝えて理解してもらい、現在に至っている。cさんが2歳の頃、母親と共にDr. から発達障害の告知を受けている。小学校の途中から養護学校へ移り、中、高校共に養護学校に通う。その後、掃除や軽作業の就労をしている。

『子どもへ関わりたいが上手くいかない良くわからない』

当初の父親は、子どもに<何をどうしていいのかわからない><何を子どもにしていいのかわからない>といった様子があり、戸惑いを抱えたまま<父親なりに子どもへ関わろうとする>と父親なりに努力をしていたことが考えられた。父親は、子どもへの関わりをしていないわけではないが、よくわからなかったり、<上手く関わりたいけど失敗>という体験をしていた。障害を知ってから【父親なりに関わってみる】様子や【気にならないけど、相談についていく】といった気持ちで子どもに接していた。<子どもに関わりたいがよくわからない>が、父親として子どもになんらかの接触を試みていた。しかし、直接的に<父親なりに上手く関わろうとするが上手くいかない>という体験をしていた。

『育児は母親頼りから、父親なりに協力していく』

子どもに対してどのように関わっているのかわからない父親は、【母親に言われてとおりにする】というように<子どものことは母親が頼り>としている。父親は母親から子どもの話を聞いているが、<育児は母親頼み>になりがちであった。子どもに障害があると知った後も<育児は母親任せ>になりがちであった。

子どもが相談機関にかかるようになり【よく子どもを見るようになった】ことで父親の中で<子どもを知るようになり、不安が募る>という気持ちの変化を見せる。家事育児を母親に任せにして仕事ばかりしてき

た父親が、母親に頼れない状況でその苦勞と大変さを体験したことで<家族へのショックと後悔>を経験していた。実際に子どもを目の前にすることで、その母親の大変さやもしも父親自身が関わっていたらもっと子どもは違ったのではないかと<子どもへ関わらなかった後悔>を感じていた。また、ここまで母親が育ててきたことへの敬意と労いの気持ちから<母親への後悔と申し訳なさ>を感じ、少しずつ家庭に関わるようになっていった。

『障害はよくわからないが、ありのまま受ける』

障害を知った後、【障害なのか甘えなのかわからない】と的確に<障害として捉えきれていない>父親がいる。そのため、<障害とは何か>と漠然とした感覚に陥っている。“障害を持って生まれてきたことになんでうちの子なんだろうという気持ちはなかった”と語るように、障害を否定するのではなく<子どもをありのまま受け止める><障害をありのままを受け止める>といった障害も子どもも含めて一つと捉えていた。一方で、<障害を気に留めていない>といったように関心が乏しいことや母親に任せているという認識から消極的な父親になっていることも窺えた。

『仕事重視の生活に葛藤し、調整を図る』

父親は食べるためにお金稼いで家に入れて行くという認識から、家庭は母親任せとなり<家よりも仕事に目を向ける>傾向が強く、社会的に責任のある仕事を用いて、<仕事による父親的振る舞い>を行っていたようである。障害を知った後、子どもの大変さにも徐々に気づき始めてからの父親は、<仕事に逃げる>という意識が見られていた。各々の父親を見ると、母親が倒れてしまい家庭に入らなければならなくなったこと、単身赴任をして父親自身が家庭を離れてしまったこと、子どもの問題行動や大変さを体験したこと、という父親自身が家庭を振り返るきっかけは個々様々であるが、子どもの障害というものによって、逃避したい気持ちと向き合おうとする気持ちのゆらぎが生まれている。

父親が「仕事から離れることは勇気がある」と語るように、父親として自分を満たしていた仕事から、自信や不安の多い家庭に関わって行くようになるため<仕事に対する後悔>を感じていた。以前通りに仕事がやりたくても難しいという<仕事への葛藤と未練>で悩んでいる姿があった。父親は、これまで何も関わって来なかったという後悔から<家庭への意識が強くなる>。今さら家庭に対してどのようにしていいのかわからないが、母親だけに任せられない想いにより<仕事と家庭で調整を図る>試行錯誤が行われていた。

『父親自身の模索と変化』

家庭に関わるようになってから、<父親像を模索>が起きており、【子どもにいろいろな経験をさせてやりたい】という父親なりの考えを抱きつつ、仕事ばかり

表1

『コアカテゴリー』	<カテゴリー>	【コード】
子どもへ関わりたいが上手くいかない良くわからない	a 何を子どもにしていいのか困惑	特に気にしていない
	a 上手く関わりたいけど失敗	どうしたらいいのか
	b 何をどうしていいのかわからない	気にならないけど、相談についていく
	b 父親なりに上手く関わろうとするが上手くいかない	父親なりに関わってみる
	b 父親なりに子どもへ関わろうとする	子どもと一緒に行動する
	c 子どもに関わりたいがよくわからない	子どもと一緒に過ごす
育児は母親頼りから、父親なりに協力していく	a 子どものことは母親が頼り	母親に言われたとおりにする
	a 家族へのショックと後悔	母親に頼れなくなったことで大変さを知る
	a 子どもへ関わらなかつた後悔	自分がしっかりやっていたらと自責する
	B 育児は母親任せ	障害があっても小さい時は母親任せ
	b 母親への後悔と申し訳なさ	子どもの成長から母親の苦労を知る
	c 育児は母親頼み	母親からこの様子を聞いていた
	c 子どもを知るようになり、不安が募る	よく子どもを見るようになった
障害はよくわからないが、ありのまま受ける	a 障害を気に留めていない	障害告知の時もあまり覚えていない
	b 障害として捉えきれていない	いつか変わるだろう
	c 障害とは何か	障害なのか甘えなのかわからない
	c 子どもをありのままを受け止める	障害を否認することはなかった
	c 障害をありのままを受け止める	最後は、障害があってもなくても変わらない
仕事重視の生活に葛藤し、調整を図る	a 家よりも仕事に目を向ける	家庭よりも仕事
	a 仕事の葛藤	仕事を抑えて家庭に力を入れる
	b 家庭よりも仕事に目を向ける	家庭よりも仕事をしていた
	b 仕事に対する後悔	単身赴任が良くなかった
	b 仕事への葛藤	仕事を断るべきか悩む
	c 仕事による父親的振る舞い	仕事で忙しい
	c 仕事に逃げる	仕事を理由に家庭にいなかった
	c 仕事への葛藤と未練	可能であれば、両方選びたい
	c 家庭への意識が強くなる	仕事から家庭を意識する
c 仕事と家庭で調整を図る	仕事と家庭でのバランスの難しさ	
父親自身の模索と変化	a 父親像を模索	父親自身を振り返る
	b 父親の役割模索	就労は父親の出番である
	b 自分自身の変化に気づく	人と関わることでいろいろと変わった
	c 父親像を模索	父親として子どもに関わりたい
	c 家族との関わりから父親を意識	子どもにいろんな経験をさせてやりたい
c 自分自身を振り返る	子どもとの関わりたい気持ちに気づく	
仲間や信頼できる人との出会い	a 他の人の力を借りることの大切さ	やっぱり直接関わるのは難しい
	a 親の会活動で子どもを支える	親の会で活動する
	b 頼れる人がほしい	周囲の人の助けを受ける
	b 親の会で交流をする	親の会で話ができた
	c 子どものわからないことを人に聞いた	わからないから人を頼る
c 人と関わり合うこと大切さ	人と繋がることは大事	
子どもを社会に出したい	a 子どもの社会自立を期待	子どもに合った仕事をしてほしい
	b 子どもの社会での自立を懸念	子どもの将来に対する不安
	c 子どもの自立を意識	子離れという課題
子どもの将来が不安になる	a 子どもの将来不安	子どもの仕事不安
	b 現実社会に対するショック	社会の現実に困惑する
	c 社会の現実につぶかる	なかなか受け入れてもらえない

りであった父親が<家族との関わりから父親を意識>するようになっていった。そこには、【父親として子どもに関わりたい】という想いが裏付けされている。

父親として何か子どもにできることはないだろうかと<父親の役割模索>をしており、障害だから将来が不安、悲観するのではなく、今後どのように生きて行くかを念頭に考えていた。父親自身が社会で働いていることを重ね、自分の子どもにも社会で自立して働いてもらいたいという想いが窺えた。父親たちにとって、子どもが女の子ではなく、男の子であったということがより社会で働くという意識を抱かせたようである。

子どもと具体的に向き合うようになり、子どもの障害を理解するにつれて、<自分自身を振り返る>様子があった。この振り返るといのが、父親の<自分自身の変化に気づく>きっかけとなっており、様々な人と関わることで根本的な部分がすべて変わったというわけではないが、親の会や父親同士が知り合うことによって柔軟で状況に合わせた考え方ができるようになっていた。

『仲間や信頼できる人との出会い』

父親としては、子どもとの関わりにおいて【やっぱり直接関わるのは難しい】と再度チャレンジをしたものの上手くいかない経験をしているが、<他の人の力を借りることの大切さ>を感じていた。父親として、子どものことを理解したいと思った時に<頼れる人がほしい>ということ、<子どものわからないことを人に聞いた>ことが安心できた体験となっていた。特に親の会に所属している父親達は、直接的に関わることは難しいが、<親の会活動で子どもを支える>という子どもには間接的ではあるが、社会に向けて働きかけようと意識が見られた。

父親達からは、<人と関わり合うことの大切さ>という人と人との繋がりを重要と感じていた。さらに、<親の会で交流する>ということが障害のことを多く学び、子どもの生き方を見極めていくために父親の語る場所、居場所を必要としていた。

『子どもを社会に出したい』

子どもの将来については、社会で就労をすることを父親は思っており、障害を持ちながらも【子どもに合った仕事をしてほしい】と願いつつも、出来る限り一般就労で<子どもの社会自立を期待>している姿が窺えた。しかし、現実社会の就労状況を父親たちは知っているが、本当に働けるのだろうかかと漠然とした想いも抱えつつ【子どもの将来に対する不安】を感じ、<子どもの社会での自立を懸念>していた。

父親としては、子どもの成長のために寄り添ってきたが、社会で自立するために少しずつ離れるといった【子離れという課題】を抱えている。父親は、<子どもの自立を意識>しており、障害があっても子どもに

対して積極的に社会自立させるようと働きかける意図が見られた。

『子どもの将来が不安になる』

障害ということでのどのように社会から見られ、扱われるかということ仕事をばかりしていた父親は気づけてこなかった。しかし、少しずつ子どもと向き合い、家庭に関わるようになってからは、社会での理不尽さ感じつつも、子どもが受け入れてもらえない現状を痛感するなど<社会の現実につづかる>体験をしていた。

障害児を目の前にすると、【社会の現実に困惑する】がそれだけを言っていられず、<現実社会に対するショック>を日々受けながら父親として何ができるのかを模索していた。父親は、子どもの社会自立を目標に掲げているが、現代社会において子どもが就職をしても「一生勤めるには難しいかな」と感じ<子どもの将来不安>を強く受けていた。

V. 考察

1. 父親の生活体験から見た変化

家庭を振り返るようになってから、父親となる意識を強く持ったことが窺える。Aさんは、現代の発達障害の子ども達への療育体制や親への支援が充実してきたことから、自分の子どもにもやっていたら違ったのではないかという自分が何もやってあげられなかった反省の気持ちを抱きつつ、親の会の仲間によって安心感を持てるようになっていた。子どもとの関わりには、距離を取りながら関わる方がいいと感じ、自分なりに父親像というものを見出していった。Cさんは、育児に積極的に参加したいという想いを持っており、家族優先で関わっていた。しかし、子どもとの関わりの中で改めて振り返ると、Cさんは自分が子どもの時に父親にしてもらいたかったことを自分の子どもにしてあげたいと強い意識を持っていたことに気づいたのだ。育児に関わることを通して、己の父親を意識して父親へなっていく過程があったと考えることができる。これは、氏家(1996)の述べる母親の親になるプロセスに類似していると思われる。

父親たちの語りを見ると、Aさんは、「・・・そう言われれば劇的なものかもしれませんがね。うーん、ちょっと、僕自身はそんなに意識はしたことないです」、Cさんは「自分が意識して変わっていかうとか変わっていったっていう自覚はあまりないんです」と語っている。これは、まだ途中経過であり、ようやくここまでたどり着いたという事態から、述懐する時期ではないからなのかもしれない。あるいは、己の変化には気づきにくいということも考えることができる。しかし、子育てに不参加あるいは消極的参加から、戸惑いを経て、それぞれが自らの父親像を見出してきたことがわかるのではないだろうか。田中(2007)が「自

分なりに育児を見出すことで柔軟な育児姿勢に繋がる」と指摘しているように育児を通して、育児参加する父親像が形成されているということが窺える。結果として、父親自身は育児だけでなく、自分自身を柔軟的に変容させることができるように成長していたと考えられるのではないだろうか。

2. 発達障害児と父親が家庭で歩むこと

父親は、仕事優先ではあるものの子どもに関わりようとしているが『子どもへ関わりたいが上手くいかない良くわからない』というような、出来たという実感の持ちにくさ、障害の特性による関わりにくさ、というものに翻弄されてしまっていると研究協力者の語りから考えられる。そのため、子どものことでわからないことがあっても何をどのように相談していいかわからないまま、母親頼みになってしまうため、家庭内で孤立してしまう傾向にあると思われる。本研究の父親を見ると、誰かに相談できることが安心感や助けになっていたことが孤立から周囲と連帯できていったと考えられるのではないだろうか。ただ、それは、障害がわかり、子どもの大変さに父親自身が気づいた後ということであった。それ以前の父親は、子どもに対して困り感や不満を抱えるより、仕事に気持ちを向けて気にかけないようにしていると言った方が正しいのかもしれない。やはり、誰しも活躍する場が必要であり、育児や家庭で活躍できる場所がなかったことから、仕事の方が充実感を得やすいため、社会的文化的な役割意識を抱きやすいのかもしれない。

障害児の父親たちは、まったく育児に興味をもっていないというわけでないため、自ら関わろうと努力もしている。しかし、それが上手くいくことが乏しく、少ないため、継続して積極的な意識を保てないことが課題と思われる。また、仕事など家族に関わる時間が少ないため、子どもの様子に違和感を感じたとしても、障害があると聞いたとしても具体的かつ深刻な状態を直接目にすることが難しい。そのため、父親は母親に比べて子どもの状態を的確に捉えることがより遅らせてしまいやすい。本研究からは、発達障害を父親に理解してもらうために体験や子どもの特徴を掴むきっかけを必要としていると思われ、時には聴くだけでなく視覚的な情報などを用いて具体的にイメージできるようにすることが効果的な影響を与えるのではないだろうか。実際に父親は、家庭での経験を通して生き方や家庭観を再発見という作業が行われていた。父親の変化を促すために急な変化を生まなくとも、これからの父親自身の意識変化のためには、きっかけとなるような情報や場所からの刺激を受けておくことが必要と思われる。支援する側としては、父親が何気なく参加出来るような場や子どもに関する知識を共有できる場を作り、どのように父親を呼び込むことができるかという課題を解決することで、父親と障害児、そ

の家族を歩みやすくさせると考える。

VI. まとめ

発達障害児の父親は、当初多くの父親がそうであるように仕事に没頭していた。しかし、障害を抱えた子どもの状態や特性に向き合い、母親の家庭における生活の様子を知るなどの具体的な気づきがあることによって、家庭を顧みるようになり、家族に組み込まれていくことで受動的となることで徐々に主体的な家庭の人を目指していこうとする姿がある。父親には、改めて妻への感謝と後悔から新たに前向き又は積極的な父親となっていこうとする様子も見られている。しかし、障害のある子どもとその家族に父親として関わるなかで、溶け込めない不全感やとまどいを感じるようになり、多くの葛藤は、親の会やその会のピュアメンバー、子どもに関わる人々によって支えられていることがわかった。このように、父親は、家庭と社会との関係のなかで生じる課題を乗り越えようとする一方で、乗り越えられない部分も大きく経験し、右往左往していつている。父親の体験を振り返ってみると、従来の障害のある子どもの親の成長過程は、階段を上るようなイメージを想定されやすいが、障害特性と子どもの未確定な成長に付き合う親の不安や葛藤、喜びによって、当然右往左往するものということがわかる。

親の障害受容について、一般的に障害児を持つ母親は、Drotar (1975) の段階説のような5つの受容過程を重ねながら変化すること、Olshansky (1962) の慢性的悲哀説のように絶え間なく悲しみ続けている状態を示す。しかし、父親は、ショックや否認を飛び越えて現実的・楽観的に捉え悲しみ続けることよりも、どのように適応していくかに注目していると推察できた。父親は社会での仕事によって家庭から切り離されてしまい、母親が子どもの障害という現実を一辺に引き受け、ショックや悲嘆する姿を見ているため、同様の状態を曝け出せないのかもしれない。広瀬 (1991) が、3歳で障害告知を受けた父親は現実的で楽観的に受け入れていると指摘しているが、本研究を踏まえると、発達障害の子どもの年齢に関係なく父親は、現実的で客観的に受け止めやすいのかもしれないという仮説を立てることができる。

VII. 研究の限界と今後の課題

今回の研究は、父親に焦点を当てた研究であり、発達障害の課題や特徴を検討するまでに至っていない。さらに、健常児と障害児の父親を比較するのではなく、まず障害という大きなものを抱えた父親がいかに生きているのかの一例を提示するまでにしか足らなかった。やはり調査協力者が3人ということから、父親に共通する体験を示せたが、詳細な部分まで抽出することは難しく、父親の世代や障害告知の時期の違い

など多くの課題がある。近年の父親の仕事や家庭生活状況に変化は起きているため、十分とは言い難いものの家庭における父親が体験していることを大枠で描けたと考える。本研究から見ても、家庭内での父親の存在というものは重要であることは感じられた。これは、父親研究を進めていく上で一助となると考えている。今後は、父親からの視点だけでなく、母親の視点を含めながら複合的に検討を行い、障害児を抱える家庭をどのように支えていくことが大切となるのかを提示し、現代社会でより良く生きていくための方略を検討していきたいと考えている。

文献

- 1) 荒木美幸. 育児期にある母親に対するソーシャルサポートと育児ストレスとの関連性. 長崎大学医療技術短期大学部紀要. 2001: 14(1): 89-95.
- 2) Drotar, D., Badkiewicz, A., and Irvin, N., et al. The Adaptation of parents to the birth of an infant with a congenital malformation. A hypothetical model Pediatrics. 1975: 56(5): 710-717.
- 3) 福丸由佳. 乳幼児を持つ父母における仕事と家庭の多重役割. 風間書房. 2003.
- 4) 原井川誠仁. 保護者の障害受容において父親が果たす役割—父親の家事・育児行動への参加に着目して—. 高知大学教育学部研究報告. 2008: 68: 137-148.
- 5) 橋本真知子・佐久間宏. 障害児をもつ母親の自己成長感に関する研究—母親へのアンケート調査を通して—. 宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要. 2004: 27: 323-332.
- 6) 広瀬たい子・上田礼子. 脳性麻痺児(者)に対する父親の受容過程について. 小児保健研究. 1991: 50(4): 489-494.
- 7) 柏木恵子. 父親の発達心理学父性の現在とその周辺. 川島書店. 1993.
- 8) 柏木恵子・若松泰子. 「親となる」ことによる人格発達: 生涯発達の視点から親を研究する試み. 発達心理学研究. 1994: 5(1): 72-83.
- 9) 北川憲明・七木田敦・今塩屋隼男. 障害幼児を育てる母親へのソーシャルサポートの影響. 特殊教育学研究. 1995: 33(1): 35-44.
- 10) 国民生活白書. つながりが築く豊かな国民生活. 時事画報社. 2007.
- 11) L.リチャーズ. 大谷順子・大杉卓三訳. 質的データの取扱い. 北大路書房. 2009.
- 12) 牧野カツコ・中野由美子・柏木恵子. 子どもの発達と父親の役割. ミネルヴァ書房. 1996.
- 13) 町田おやじの会. 「障害児なんだうちの子」って言えたおやじたち. ぶどう社. 2004.
- 14) 目良秋子・柏木恵子. 障害児を持つ親の人格発達—価値観の再構築とその要因—. 発達研究. 1998: 13: 45-51.
- 15) 森下葉子. 父親になることによる発達とそれに関わる要因. 発達心理学研究. 2006: 17(2): 182-192.
- 16) 中塚善次郎・蓬郷さなえ. 障害児を持つ母親のストレスと家庭における夫婦の役割分担について. 鳴門教育大学研究紀要教育科学編. 1989: 4: 139-149.
- 17) 及川克紀・清水貞夫. 障害児をもつ家族の問題—家族研究の問題と課題. 発達障害研究. 1995: 17(1): 54-61.
- 18) Olshansky, S.. 松本武竹子訳. 絶えざる悲しみ—精神薄弱児をもつことへの反応 家族福祉 家庭診断・処遇の論文集. 家庭教育社. 1968: 133-138.
- 19) 佐藤郁哉. 質的データ分析法 原理・方法・実践. 新曜社. 2008.
- 20) 下川原茂和. 父親の役割と子どもへの想い. 小児看護. 2004: 27(9): 1260-1262.
- 21) 新谷由里子・松村幹子・牧野暢男. 親の変化とその規定因に関する一研究. 家庭教育研究所紀要. 1993: 15: 129-140.
- 22) 田中美央. 重症心身障害のある子どもを育てる父親の体験. 自治医科大学看護学ジャーナル. 2007: 5: 15-23.
- 23) 田中智子. 障害児の父親の「当事者性」に関する考察. 大阪健康福祉短期大学紀要. 2006: 4: 49-57.
- 24) 氏家達夫. 親になるプロセス. 金子書房. 1996.

受付: 2012年11月30日
受理: 2013年2月15日

Father's experiences living of children with developmental disorder-The history of three father and sons

Ryosuke IMANISHI

Sapporo-shi child consultation center

This study clarifies what kind of experience father of the development handicapped child has with a child in child-care process.

Eight experiences were led by findings.『He wants to be concerned with a child, but don't go well and understand it well』 『The child care was a mother reliance, but then begins cooperation for father』 『He does not understand the obstacle, but take straight fact』 『He held conflict in the life with important work and planned adjustment.』 『Grove and change for father oneself』 『Encounter with a friends and a reliable persons』 『He wants to send a child to the society』 『The future of the child becomes uneasy』

Father flexibly changed child care posture and father oneself. The father is not good which is striving to be concerned with a child. It is unimaginable a concrete and serious state that sense of incongruity may be felt for things and a child with little time to play at home. It thought that the father was easily understanding experience of the developmental disease and asking for the point.

Key words : Children with developmental disorder, father, child care, experience of the life